仰木の里小ESDクラブ（有志活動）活動案

大津市立仰木の里小学校
校長　山岸　憲明

１　活動名　「“みのりの森”でもっとできること～有志クラブの活動～」＜生き物を呼び集めたい＞

２　活動の目標

・森の環境や在り方、利用するみんなの願いを調べ、実現可能なプロジェクトを企画し、準備や運営などに関するノウハウを身に付けていく。（知識・技能）
・“みのりの森”を活用して、みんなが森に親しみ、大切にする気持ちを持てるよう、学校の雰囲気がよくなるよう、活用の方法を考え、目的を追究するために行動していく。（思考・判断・表現）
・仲間と協力し合い、それぞれのよさや得意なことを生かして実践する態度を自ら育てる。（主体的に学習に取り組む態度）

３　活動に期待する価値観

（１）教材観

学校林“みのりの森”は、開校後に当時の子供達の手で植林された人工林である。多くは、イチョウ、カシ、クリ、クルミ、カリンなどの木の実が成る樹木であり、毎年、多くの木の実が収穫できる。これまで、昼休みなどに校長が開放し、遊び場として利用させることが主で、学習の場としては、４年生のやまのこ事業[i]関連と低学年の秋見つけなどで活用する程度に留まっていた。

森の規模は0.72haと、市内学校林（３校が保有）では２番目の面積を有しており、その分、枯木の伐採や勝手生えした藪の除去など整備に多くの予算が必要であり、数年手を入れないと、樹木が繁茂し鬱蒼とした暗い環境となり、活動には不向きな状態となりがちであった。令和４年度に緑地推進会（みどりの募金）の学校林整備事業に申請し、資金調達ができたことから、児童が夢中になって、自らの頭と体を存分に使って活動できる環境づくりに着手した。現在は、明るく、小鳥がさえずる下、いろいろな活動が可能な状態になっている。

森の自然としての状態は、樹齢３０年を超えた巨木も多いが、やはり住宅地の中にある人工林であることから、生物的に豊かな環境ではない。４年生では毎年、人工林と自然林の違いを学習しているが、その在り方はどうなるのが理想的なのかを考えるまでには至っていない。それはとても高度な理解と想像力を必要とする教材（課題）になると考える。

さらに、整備の上でも、ネイチャー活動をしていく上でも、地域・関連団体、企業等の協力者にとっても生き生きと楽しみ支援できる潜在的な価値を有することが過去の事例から分かっている。学校の特色ある取組みとして、ダイナミックに展開していける期待が生まれる。

本指導案では、様々な取組みの中から、けっして簡単ではない“生き物を呼び集めたい”という子供の思いをプロジェクト化していく事例を取り上げる。

（２）児童観

“里っ子ESDクラブ”は、令和４年１１月に発足した有志で集うクラブ活動である。本来、ESD

の取組みは、学年や児童会を主体に推進されるものと想定していたが、実際のところ、教職員の多忙さから遊びのゆとりが生まれにくく、経験やアイデアを生かした取り組み方に発展していかない歯がゆさを感じていたことから、本校で従前より有志活動をしてきたエディブル・スクールヤード[ii]やアクアリウム部[iii]同様の有志クラブ活動を、校長が顧問となり設立・募集をかけた。一か月でSDGsに興味を持つ３年生以上の１５名程の児童が集まり意欲的に活動し始めた。学習会や興味がある活動に休み時間を中心に自由に参加している。近畿コンソーシアム子どもフォーラムの参加や大津市総合教育会議や地域人権の集いで発表する児童も生まれている。休日・放課後での活動機会がいくつかあることから、こうした積極的な児童が必要である。またそうした活躍に刺激され、今はSDGsクラブ[iv]児童を含め、８０名超（児童数３０９名）が登録している。

最近になって、自分達からやりたい活動をミーティングで提案する児童も出てきており、日頃からSDGsに関連する知識や経験をクラブ活動にもつなげてみようとする意識・意欲が芽生えてきていることをうれしく思う。また、提案の理由も、「学校を一層よくしたい」、「役に立ちたい」、「一人じゃできない、みんなとしたい」というESDが目指す資質・能力育成にもつながる動機と感じられる。

（３）指導観

有志クラブ活動では、時間的な制約が最も課題である。児童に活動を促し、相談、学習会をするのは、昼休みに行う僅か２０分ほどの全体ミーティング（学期に２～３回）の場と、ＥＳＤスタジオ[v]に長休み・昼休みに自由来室してくる児童への関わりだけとなる。

活動の方向や取組む内容なども、できるだけ子供同士で相談して考えるように伝えてきた。顧問が行うのは、休日等の参加者の募集・引率、締切ある取組みの進捗状況の確認と指導助言、児童からの要請を受けての物品調達や地域協力者等の支援の取り付けといった裏方の仕事をすることであり、子供がアイデアを出し合う場面では育成視点で肯定的な言葉かけをするよう意識している。ただ、登録者が増えていくと、児童同士の関係性が必ずしも良好でない場合もあり、個性を認め、互いを尊重する意識付けや強制的な言動を押さえる指導が必要なこともある。

中には、「もうやめようと思う」と申し出てくることもあるが、これをやめさせること＝SDGsの意識低下になることは避けたいと考え、退部は今のところ認めず、やれる活動だけやればよいからと慰留している。

それぞれの得意なことや興味あることを自分のできる範囲で、仲間と認め合い、パートナーシップで協力し合い活動をしていくことを大事に、高い学校文化をつくる子供に育ってもらいたい。それが、持続可能な社会づくりの担い手を育てると考えている。

今回の“生き物を呼び集めたい”活動では、SDGsクラブと６年生総合的な学習「インプルブメント計画[vi]」での巣箱制作活動を中心に、ESDクラブ児童と地域・関係団体協力者が加わって、設置とその後の観察、イベント活用などにつなげたい。

（４）ＥＳＤとの関連

活動で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

②相互性　森の命のつながりや仕組みを理解しようとすること。その上で、人口の森に生き物を呼

ぶ課題の難易度を実感し、一層の探究意欲につなげていく。

⑤連携性　子供同士のたて・よこのつながり、協力者とのナナメのつながりによる他者との関係や集団での自分の位置を見つけること。居心地のよさ、取り組みのよさに気付けること。

⑥責任性　みんなの学校であることの意識付け、自分から後輩へとつないでいく関係。森を大切にしていく意思の継承。最後まで協力し、やりとげ、結果を確かめること。

育てたいＥＳＤの資質・能力

③システムズ・シンキング

森の生態系に関心を持ち、その仕組みを理解しようとすること。自然界とは異なる立地、気象条件、植生、人為的な利用などを多角的視野で見る力を育てる。人工林であるからこそ可能な開発と困難な課題に気付き、持続可能な利用の可能性を探ろうとする態度や探究心を育みたい。

④⑤コミュニケーション力および協働的問題解決力

仲間や協力者と、互いのよさや思いを尊重し合い、協働的な活動を通して集団社会の中で自分を生かし参加することができる協力的態度や人間関係形成能力を培う。

変容を促すＥＳＤの価値観

③自然環境、生態系の保全を重視する（生物多様性の重視）

森の活動の中で、自然を慈しみ、大切にしたいという気持ちに向かわせたい。様々な生命との共存が人類の永続的な営みになることを理解させたい。

①世代間の公正

世代を越えた人との交流の中で、果たせる役割や人間関係の在り方を感じ、自らも役割意識を持って自分のためだけではない共存する生き方への道を学ばせる機会としたい。

⑤幸福感の重視

人や自然との交歓を通して、豊かさだけではない幸せの目的を体感させたい。

達成を期待するＳＤＧｓ

SDG11：住み続けられるまちづくりを　　SDG15：陸の豊かさも守ろう

SDG17：パートナーシップで目標を達成しよう

４　活動評価の観点

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①実態調査、それに基づく実践計画していく技能 ②準備、運営、説明といった実行技能	①目標達成を念頭としたアイデア、手立てを考える。 ②プロジェクト実施の設計・行動・振り返りの仕方を考える。	①仲間との相談・協力、自分を生かし参加する姿勢

５　１年の活動計画

次	活　動　内　容	活　動　へ　の　支　援	評価・備考
１次 動機付	○森の活用と目的 ・生き物がいて自然に近い森にしてより大切に。 ・花などを植えて憩いの場をつくろう。 ・たくさんの木の実を使うイベントで楽しく。 ・マップ活用の探検会開催でみんなに興味を。	新年のミーティングにて ・『もっとこの森をクラブの取組みで生かせないかな。』	㋐１ ㋑１
２次 調査	○実態調査（生き物調べ） ・複数種のカタツムリ、野鳥、ゲジなどの節足動物、ゴキブリ・アリといった昆虫や卵など。	・昼休みに調査（低学年も参加） ・ドングリを餌にする動物などがいないのでそのまま積もっているね	㋐１
３次 計画	○巣箱つくりで鳥や動物を呼び集めよう （好きな花アンケートの実施） （苗を育てる計画） （探検会→４年プロジェクトへ）	※協力者提案「巣箱などどうですか」 ※協力者の情報により近隣にムササビ、アオバトを確認　　校内の話題に （・花の種を調達、播種）	㋐１ ㋑２
４次 行動	○巣箱制作→SDGs クラブ、６年インプルブメント計画にて実行 （花苗の育苗・移植・世話）	・巣箱制作の支援（板材調達、加工道具、制作場所・機会の提供）	㋐２ ㋒１
	○巣箱設置	・協力者との日程・作業調整	
６次 結果考察	○実態調査（生き物調べ） ○考察	ミーティング ・成果の検証とふりかえり、次の計画	㋐１ ㋑２

---

[i] 滋賀県では、４年生に『やまのこ事業』（森林体験学習：大津市は泊を伴う）、５年生で『うみのこ事業』（琵琶湖フローティングスクール宿泊体験）を実施している。

[ii] エディブル・スクールヤード（学校菜園活動）：食育菜園により、自然界と命のつながりを体験的に学ぶエディブル教育。本校では、（一社）エディブル・スクールヤードジャパンの指導を受け、地域住民団体（里小エディブルスクールヤード）の支援を受けて、学年単位や有志児童による栽培活動をしてきた。

[iii] アクアリウム部：2017 年に在任した澤村教頭が多数の水槽に魚類飼育を始めたことから、その世話や管理などに自発的に参加する児童のグループが誕生していった。

[iv] SDGs クラブ：休み時間や休日への参加を求めない入門者向け課業内クラブとして令和５年に設置。学習会、調査活動、制作、福祉体験などに取り組む。

[v] 物置と化していた放送室奥のスタジオを児童と整備して、活動室『里っ子ＥＳＤスタジオ』を設置。クラブ児童だけでなく、SDGs に賛同する全ての児童の入室を認めている。行事等の準備では、メンバー外児童の助力も頼りにしている。ここでは、学年を越えて子供同士が協力して作業や企画相談をしている。

[vi] ６年生が学校をよりよくしていく目的を持って、やりたいことを個人・グループが自発的に企画・準備・実行していくプロジェクト型学習として実施する。佐藤市長による学校思いやり予算“夢プロジェクト事業費”を本校ではこの取り組みを優先し予算執行しており、物品などの購入計画も児童が自ら調査・計画し、担当事務に申請することを奨励する起業・金銭教育の一面も意図している。